

夕方、窓から外を眺めていると、

ふいに霧が立ちこめてくることがあった。

あっという間に、

窓から五メートルと離れていないプラタナスの並木の、

まず最初に梢が見えなくなり、

ついには太い幹までが、

濃い霧の中に消えてしまう。

街灯の灯りの下を、

霧が生き物のように走るのを見たこともあった。

そんな日には、

何度も窓のところに行って行って、

霧の濃さを透かして見るのだった。

ミラノに霧の日は少なくなったというけれど、

記憶の中のミラノには、

いまもあの霧が静かに流れている。